
my past is your ...?

宙碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

my past is your . . . ?

【Nコード】

N6303T

【作者名】

宙碧

【あらすじ】

一人の孤独な少女と、あと一歩が踏み出せないマスター。

喫茶店の中で歩いていく、物語。

(マスター × 常連客)

#00 プロローグ

ずっと憧れていた。
大好き、だった。

あの笑顔も。
あの指先も。
あの仕草も。

すべて、私だけのものにしたかった。

独り占め、したかった。

・・・“だった”なんて、そんなの嘘。

今もまだ、大好きなの。

でも、そんな私の気持ちを貴方に知られたくなくて
貴方から、自分の気持ちから、逃げた。

逃げることしかできない自分を恥じた。

「それでも好きでいたい」
なんて、そんな贅沢は言えない。

うん、これでよかった。

あとちょっとで、貴方を忘れられる。

そう、あと、ちょっとで。

『 m y p a s t i s y o u r . . . ? 』

私はもうすぐ大学生になる。

あなたはもうすぐ、

#01 いつかの始まり

このころは、まさかあんなことになるなんて私も、貴方もきつと、全く思っていなかったんだ

チャイムが鳴れば、放課後になる。

友達を作るのが苦手な私は、一緒に帰る人もいない。少しさびしい気持ちになるけど、クラスに馴染めていないのは、みんな一緒。友達がまだできないのは、部活に入っていないから。自分にそう言い聞かせて、今日も一人でとぼとぼ歩く。

いくら春と言っても、まだまだ冷たい風が吹く。4月になっても寒くて全然桜が咲かないなんて、北海道ぐらいじゃないかなあ。東京に住めば、入学式の日には桜を見ることができのかなあ。と、しょぼくねながら歩いていたら、見知らぬ路地を発見した。<裏道にある >とか<隠れ家的 >といったものに目が無い私は、誰が見ても分かるように好奇心で瞳を輝かせる。

！
(こんなところに、これほどいい雰囲気的路地があったなんて・・・)

まるで泥棒にでも入るかのようになり、忍び足で路地を進んでいく。すると、一軒の喫茶店らしき建物があった。ドアの横には、お店の名前だろうか、<かるむ>という平仮名が、木で作った看板に書いてある。<open>と扉にぶら下がっているので、きつと開いているんだろう。でも、正面には窓があるものの、カーテンらしきものが引かれているため、中にお客さんがいるか否かはわからなかった。

(でも、このまま帰るわけにはいかない)

この時の私に、中の様子を見ずに帰る、という選択肢は無かった。とにかく、中を見てみたい。どんな店員さんがいて、どんなカウンターがあるのだろうか。心の中は、好奇心でいっぱいになっていた。

(いいや、入っちゃえ!)

制服だし、高校生だし。私みたいな若造が入れないお店という可能性もあるかな、と思ったけれど、この衝動は抑えられなかった。

カラン、コロン

扉をそつと開けると、上についている鈴が低めの音でお出迎え。そして。

「いらっしやいませ。」

カウンターの中に店員さんらしき男性が、柔らかな微笑みで歓迎してくれた。中にはまだお客さんはいないみたいで、店員さんも彼一人きり。

店内は小ぢんまりしているものの、木でできたカウンターや椅子が良い雰囲気醸し出しており、この一瞬で私は<かるむ>をお気に入りのお店としてインプットした。

「こんにちは。…はじめまして、ですよね?」

につこりと笑って発したそれは、とても穏やかな声だ。少し低くて、落ち着いている。この店員さんは、やっぱり店主なのだろうか。喫茶店の店主なら、やはり<マスター>とか<オーナー>って呼ぶ

のが正しいのかな。でも、＜マスター＞っておじいちゃんっていうイメージがあるけれど…彼は恐らく30代そこそこ。そう呼ぶのは申し訳ないなあ。私は頭の中で、考えをそう巡らせながら、彼と会話を進めていった。

「はい。学校帰りに、たまたま見つけちゃって。」

少し緊張しながら答えた私を、包み込むように彼は言う。手元は、グラスを拭いて、片づけて、を繰り返している。

「何か飲みますか？」

実はまだ、コーヒーやカフェオレという代物を口にしたことが無い。ここは、その辺のチェーン店ではなく本格的な喫茶店。だから私に飲めるものがあるのだろうかと思ってしまうところだった。でもなぜか、私はこれっぽっちも焦ってはいなかった。ここには、何でもありそうな気がする。何となくだけど、言えば何でも出してくれる。そんな空気感がある。

「じゃあ、アイスココアを。」

少々お待ちください、と彼は私のココアを作る準備をし始めた。

(ほら、やっぱり)

まるで初めて彼氏の家に来たかのように、きよるきよると首も目も回す。けれどもあの不安の混じったドキドキはない。周りの木目が、むしろ私の気持ちを落ち着かせてくれる。それでもはじめて来たことに変わりはなく、気持ちとは裏腹に忙しなく視線を動かしてしまう。そんな自分を、いつもは抑えておくはずなのに、今日は注

意せず放っておいた。

(あ、かわいい)

少し出っ張った柱には小さな絵が飾られている。窓辺に佇むのは小人が座りそうな小さな椅子。…至る所に、小さなこだわりが垣間見える。それは、ほんのちよつとの気配りかもしれない。でも、それらがうまく調和されていないければ、この空間は存在し得ない。彼も含めて。

「気に入ってもらえたかな」

いつの間にか出来上がっていたアイスココア。気づかない私にそつと話しかけるのは、ちよつと低めのテノール。

「はい、とても」

けれども全然汗をかいていないコップに、なんだか少し悔しかった。

一口飲めば、ほっとする。

耳触りのいい彼の声。

緩みつぱなしの私の顔。

余計なことは話さない彼。

ああ、なんて。

(心地がよいんだろう)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6303t/>

my past is your ...?

2011年8月20日13時11分発行